

日 時 平成30年4月20日（金）

午前10時00分～

場 所 都庁第二本庁舎31階 特別会議室23

葛西臨海水族園のあり方検討会 第3回

会議録

【会議】

午前10時00分～午後0時28分

○小林課長 定刻になりましたので、ただ今より、第3回葛西臨海水族園のあり方検討会を開催させていただきます。

委員の皆様におかれましては、大変お忙しい中、ご出席を賜りまして誠にありがとうございます。議事に入りますまでの間、進行を務めさせていただきます公園緑地部再生計画担当課長、小林でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

はじめに、本検討会は公開にて開催することとしてございます。本日は、傍聴者及び報道関係者の取材がございますこと、ご了承いただきたくお願いいたします。

次に、お配りしております資料のご確認をお願いいたします。お配りしております資料は次第に記載してございます。説明資料、参考資料、補足資料が、それぞれ1から3までございます。

また、委員の皆様には、議事の途中でご確認いただけるように、これまでの検討会資料を緑色のファイルにとじ、机上去用意させていただきました。

不足資料などがございましたら、お手数ですがお声がけくださいますよう、お願いいたします。よろしいでしょうか。

続きまして出席者でございます。本日は全員の委員にご出席いただく予定となっておりますが、千葉委員及び海津委員につきましては、少し遅れてのご到着となりますので、よろしくお願いいたします。

東京都及び葛西臨海水族園を運営いたします公益財団法人東京動物園協会の出席者につきましては、恐れ入りますが、お配りしている座席表にてご確認いただきたく、お願い申し上げます。

それでは、西座長、以降の進行をよろしくお願いいたします。

○西座長 では、これから私が進行を続けさせていただきます。

まだ2人の委員の方が見えていないということですが、間もなくお見えになるということなので、進めていきたいと思っております。

本日は議題が非常に多くて、ちょっと大変だと思いますので、皆さん、協力をお願いいたします。

事務局の資料説明ののち、また、本日は葛西臨海水族園園長より、今後の水族園はどうあるべきと考えているか、大切にしたい・実現したいと考える展示はどういうものかなどについて、直接お話しいただくことになっていきます。水族園の現場の声も、本日の検討の参考にしていただこうと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは、事務局より資料の説明をお願いします。

○小林課長 ここからは着座にてご説明申し上げたいと思っております。

まず、本日の資料構成からご説明をさせていただきます。説明資料1から3をご用意ください。

右上に「説明資料1」と書いてございますA3判の資料でございますが、こちらが本日も検討いただきます本編となります。

説明資料2は、A4判のホチキスどめの資料でございます。こちらは事前に委員の皆様にお聞きしたご意見等を、説明資料1の項目に沿ってまとめた資料でございます。

説明資料3は、A4の1枚ものでございます。こちらは、あるべき姿や展示をご検討いただく際、説明資料1にない、キーワードとなる言葉を一覧としてまとめたものとなっております。

本日は、この3種類の資料を中心に検討いただこうと思っておりますので、よろしくお願いたします。

なお、その他の資料、参考資料、補足資料でございますが、こちらにつきましては別にクリップどめをさせていただきました。ご検討の中で、適宜ご参照いただければと思います。

それでは、説明資料、以降「資料」と呼ばさせていただきますが、資料1をごらんください。目次に沿って、最後まで通してご説明を申し上げたく存じます。

本日も検討いただく項目は6項目となっております。論点は、資料1の構成、視点、表現方法などでございます。資料1の内容が適切かどうか、見直すべき・修正すべきことなどについてご議論いただき、具体的にこうしてはどうかなどのご提案をいただければと思います。

資料1を1枚おめくりください。

最初は1「葛西臨海水族園あるべき姿」、以降「葛西」と呼ばさせていただきますが、葛西のあるべき姿について、でございます。

1ページは、あるべき姿をご検討いただく前提となります、第2回までの委員ご意見並びに社会背景などをまとめたものとなっております。本日も、詳細のご説明は割愛させていただきます。存じます。

2ページをごらんください。

葛西のあるべき姿を、今回「ミッション／ビジョン」として定めたいと考えております。海外の水族館では「ミッション／ビジョン」として、その水族館の使命や目標を発信する例が多く見られます。葛西でも同様の示し方ができればと考えているところでございます。2ページの案に対しまして、委員の皆様からはさまざまなご意見、ご指摘をいただきました。資料2及び資料3もあわせてごらんいただければと思います。

資料1の「ミッション（案）」でございますが、グローバルの視点、ローカルの視点から作成したのですが、資料2の1ページ、こちらA4判のホチキスどめの資料でございます。こちら1ページにご意見を記載させていただきました。

まず、「ミッションの視点」に関しますご意見としまして、今足りないものとして「地球

規模の海洋」「人間の暮らしにつながる概念」を柱として考えるべきであるということ。

表現に対しますご意見としましては、「ミッション①」の中で「海の中」という表現をいたしました。海だけではなく川や水も含めた表現とすべきではないか、とのご意見をいただいております。

なお、資料1のつくり方でございますが、赤字の部分が事務局がポイントと考える部分、黄色のマーカー部分は委員のご意見、ご指摘箇所をお示しさせていただいたという形で記載をしております。

次の「ビジョン」でございます。まず「構成」に対するご意見でございます。具体的にご提案いただいた構成がございます。資料2は2ページをごらんください。

「目指すもの」として、SDGsへの貢献、ライフスタイルの転換、人と海とのつながりを掲げ、取り組みとして教育活動、保全、体験の場、特別な時間を提供し交流を促す、とまとめられております。

このご提案のほか、資料2、1ページにお戻りいただきますが、ビジョンをパーパスという言い方にしたほうがいいのではないかと、といったものですか、ビジョンの視点が狭いのではないかと、とのご意見をいただきました。

「表現方法」では、ビジョンの②持続可能な利用が人間の生活にどう影響するのかというニュアンスを入れたい、といったものですか、④五感ではなく所感や感性と言い換えるべきではないか、⑥海洋環境保全ではわかりにくい、葛西の意図を明確にすべき、というご意見をいただきました。また、⑧海を展示するという発想が弱いのではないかと、といったご意見もいただいております。

ここで資料3について、少し解説をさせていただきます。資料3は、委員の皆様から、あるべき姿及び展示のキーワードとして挙げた言葉のうち、資料1に記載がない言葉をまとめたものでございます。どのような表現がわかりやすいかをご検討いただく際、ご参考にしていただければと思います。

続きまして、資料1は3ページ、資料2は2ページをお開きください。「4つの機能について」でございます。

まず「取組の方針(案)」の「教育」という表現についてですが、「教育」という言い方を見直してはどうか、とのご意見がございました。エデュケーションの本来の意味であり、個性を開く、引き出すということが伝わる表現、例えば学びなどに変えてはどうか、というご提案でございます。

視点や表現方法では、海をめぐる情報提供、発信の拠点になってほしい、といったことですか、大人の役割が大切である、ということ、体験を通じて学ぶことが重要、といったご意見をいただきました。

資料2の3ページをごらんください。教育④、洗練された教育プログラムでございますが、洗練より、柔軟な、先進的なというニュアンスが合う、また興味深い、どこにもないという表現がよい、とのご意見をいただいております。

次の、レクリエーションでございます。表現方法として、③の知的な体験は、刺激を与えるという表現がよいのではないかと、とのご意見がございました。

調査・研究でございます。調査・研究は、4つの機能という捉え方を見直し、別枠で整理すべきである、とのご意見がございました。また、調査・研究は片手間ではなく、きちんと研究・発表に取り組める環境を整えるべきで、研究費がつく組織体にできることが理想、とのご意見もいただきました。さらに、各機能の関係性としまして、レクリエーションは入り口、教育は手段、調査・研究は運営なども含めたベースである、とのご意見もございました。

力点の置き方に対するご意見でございます。葛西で重視すべき機能の考え方を、資料1、3ページに記載しましたが、優劣をつけると捉えられるため整理の仕方を変え、来園者の視点で関係性を整理すべきである、とのご意見をいただきました。また、調査・研究がしっかりできることが重要、とのご意見もいただいております。

資料1の4ページをごらんください。「展示・飼育について」でございます。

水族館は、水槽の展示があるからこそ水族館で、展示はその水族館のコンセプトや個性そのものでございます。葛西の「ミッション／ビジョン」と、ビジョンの実現に向けた4つの機能を発揮するため、展示は重要な手段であると考えます。

本日は「展示の計画を考えるに当たってのキーワード」について、ご検討いただきたく存じます。キーワード案は、資料1の5ページ上段に記載いたしました。「ミッション／ビジョン」からピックアップしたものと、集客の視点からピックアップしたもの、合計10のキーワードを想定いたしました。下段は、「展示コンセプト例」となっております。今後、葛西は何を伝えるべきか、そのためにどのような展示が考えられるのかを、現在、葛西にある展示をベースにイメージしたもので、参考でごらんいただければと思います。

展示に対するご意見は、資料2、4ページでございます。まず、キーワード案の構成について、具体的なご意見をいただきました。全てに共通する基本キーワードと個別キーワードが混在しているため大別すべき、というものでございまして、資料3の下段に具体例を掲載させていただいております。

「基本キーワード」に、海洋環境、生物多様性、生態系、学び、海と人とのつながりを、「個別キーワード」に、東京、歴史・文化、創造性、独自性、スター性・アイドル性をそれぞれ分類する、というご意見でございます。

資料2、4ページに戻らせていただきます。このうち、海と人とのつながり、創造性でございますが、資料1では、つながり、癒しとして記載をいたしましたけれども、つながり、癒しでは意味が広すぎるため、言いかえてはいかがかと、とのご提案がございました。また「展示キーワード」として、独創性や景観という言葉もご提案をいただいております。

「展示コンセプト例」に対するご意見では、今の書き方では図鑑になっており従来と変わらない、といったもの。海洋環境やつながりを伝える方法を検討すべきで、捉え方を見

直す必要がある、というご意見がございました。

「展示の視点」としては、興味、気づき、理解、行動につながるような展示を考える必要がある、また、深海などの今までやってきたところを強化、整理してはどうか、というご意見、教育の観点から東京の溪流、田んぼ、水辺がわかりやすい、とのご意見がございました。

展示空間をどうつくるかの施設性能とも関連しますが、単に水槽を羅列するのではなく、展示空間の起承転結があると楽しめる、とのご意見もございました。

本日は、どのような展示の仕方が考えられるのかもイメージしていただきながら、キーワードの検討をお願いできればと思います。

飼育の考え方案でございますが、資料1は1ページお戻りいただきまして、4ページをごらんいただければと思います。資料2は同じく4ページでございます。

委員からは、飼育展示は水族館特有の調査・研究で重要なことであるとのご意見や、水や空気を適切な環境に維持することの重要性やその研究の重要性を理解してもらう必要がある、とのご意見をいただいたところでございます。

続きまして、資料1は6ページ、資料2は5ページをごらんください。「運営に関する方針（案）について」でございます。全体構成は、4つの観点で分類しました。

まず構成に対するご意見として、ファンのふやし方と広報をひとくくりにし、連携を別枠で構成するほうがよい、とのご意見をいただいております。

視点や表現方法では、サービスの提供方法でございますけれども、①外部に発信しないと意味がないため、展示、プログラム等の開発ではなく、ネットツールの活用などにすべき、とのご意見がございました。

ファンのふやし方として、集客の仕組みを構築する必要、地元を受け入れられる施設であることが大切、現地とリアルタイムでつながる仕組みの構築、とのご意見をいただきました。また、③新たな名称を考えるべき、とのご意見もございます。

「広報・連携」では、広報はターゲット設定が必須であることと、②企業連携はCSRが重視されることを念頭に置いて考えるべき、とのご意見をいただきました。

「経営の観点」の③入園料は、コンセプトが料金体系にもつながるべき、とのご意見を頂戴しております。参考資料としてお配りをしてございますが「首都圏の主な水族館の比較」こちら、クリップどめの別資料、資料が多くて申しわけございませんが、右上に「参考資料1」と書いてございます「首都圏の主な水族館の比較」というA3判の2枚ものの資料でございます。こちらに、入園料金や入園者数、飼育動物などをまとめた表をご用意してございます。ご検討の参考にしていただければと思います。

「経営の観点⑥」ボランティアに関してのご意見でございます。質を下げず継続的にかかわってもらうための仕組みとして、有償化することも検討されるべき、とのご意見をいただきました。

資料1は7ページ、資料2は6ページをごらんください。求められる施設性能案につい

てでございます。

全体構成は、3つの観点で分類をいたしました。「使いやすく・魅力的な施設に」関連した視点、表現方法としまして、まず、テーマに合った観覧ルートをつくり、選択できるとよい、とのご意見がございました。また、危機管理対応がしっかりできていることの可視化が重要、とのご意見をいただきました。これは、例えば想定される津波などに対し、この施設はこのような対応をしています、というような見える化をすることでございます。

次は、①バリアフリーの表記についてですが、アクセシビリティやユニバーサルデザインというような表現をすべきではないか、とのご意見をいただきました。また、⑥どこにいても海を感じられるに関連し、せっかく水族館なので、水槽を見ながら食事ができるレストランがあるとよい、とのご意見をいただいております。

環境負荷の軽減に関連しましては、④に関連して、自然にやさしいエコなもの、というニュアンスが欲しいとのご意見をいただきました。

最後に、説明資料1の8ページをお開きください。説明資料2は同じく6ページでございます。「その他」の「周辺施設等との連携案」でございます。視点、表現方法についてのご意見、2点をご説明させていただきます。

まず、葛西周辺のランドスケープを活用すべき、でございますが、本物の海辺に下りられ、その生き物に触れられる地の利を活かすということ、インスタ映えする場所を選びお示しすること、などで魅力発信をすべきである、とのご意見がございました。

次のアプローチ方法でございますが、起点をどこにするのかによりアプローチの仕方が異なるため、起点を検討することが重要とのご意見を頂戴してございます。

以上、ご用意した資料の説明につきましては、雑駁ですが、説明を終わらせていただきます。

続けて、葛西臨海水族園園長より、今後の水族館はどうあるべきと考えるか、大切にしたい・実現したい展示等についてご説明申し上げたいと思います。

○田畑水族園長 ご紹介いただきました田畑です。きょうはよろしく申し上げます。

まず、発言の場を設けさせていただいたことに感謝を申し上げます。申しわけありません、座って発言させていただきます。

私は四十数年、動物園、水族園で働いてきまして、どうしても現実的にしかものを見られなくなっており、これから言うことについても現実的に考えざるを得ないところがあることをお許し願えればと思います。

最初に、今後の水族館がどうあるべきかということについてですが、委員の皆さま方からも指摘をいただいておりますが、3つほど、私どもの考えを述べさせていただきたいと思っております。

1つ目ですが、これは当たり前のことなのですが、生き物の飼育と展示がベースになるべきだろうと思っております。こういったことを確実に維持していくことで、それに派生する教育であるとか保全の活動がうまく行くだらうと。それから、調査研究が多分、それ

を支えることになるのではないかというふうに考えております。生き物の飼育と展示、これがやはり全ての活動の基礎になるかなと思っています。

2つ目は、やはり水族館は都市機能の一部を担う重要な施設であると思っています。治安は警察、教育は学校で担うように、文化論の担い手はやはり博物館であり美術館であり動物園であり水族館だろうと考えています。世界第一の都市を目指している東京ですから、率先して行政がその役割を果たすべきと考えております。都立水族館がないというのが私には想像できないかなと思っています。

3つ目ですが、21世紀は環境の世紀と言われております。今後できる新しい水族館が続くであろう30年後、40年後を見据えたときに、21世紀も半ばに差しかかっているわけでございます。ゼロエミッション等に代表されるような環境への配慮は、今までよりも一層これから求められてくるだろうというふうにしております。

それから、魚は資源でもあるわけですが、野生の個体群への配慮として、展示個体群に対して栄養学であるとか健康管理などを意識して、その展示個体群の長寿命化を図ることによって、別の意味での環境への配慮につながるだろうと思います。

それから、世界を代表する水族館を目指す上で、いずれは向かうであろう老朽化に対しても、つくるときから改修や展示改善がしやすい、いわゆる持続可能な施設であるということが、これも環境への配慮につながるだろうと思っています。

続きまして、大切にしたい展示、実現したい展示ということ。これも3つほど申し上げておきたいと思います。

海の世界というのは陸上と違いまして、ふだん見られない、手軽に見られないところがたくさんあります。それは私は、外洋であり、深海であると思っています。大海原をイメージさせるような空間を悠々と泳ぐ巨大なマグロであるとかサメは見る者に驚きと感動を与えると私は考えています。

また、深海は神秘的で未知な世界ということで、葛西も開園以来、ずっと取り組んできている展示の1つであります。技術的にはまだまだ難しいところがたくさんございます。少し夢を語らせてもらえば、やはりダイオウイカであるとか、メガマウスであるとか、リュウグウノツカイなどにチャレンジしたいということで、深海はまだまだ未知の世界だろうと考えております。こうした展示は、単に魚のコレクションではない海の奥深さであるとか雄大さを伝えるだろうし、来園者の知的好奇心を必ずくすぐるものになると考えております。

それから、少し視点を変えた水槽の展示としては、環境の変化に水槽が変化するような、タイムスリップする水槽であるとか、生活史、いろいろな動物が変態をするわけですが、それを全部見せる水槽であるとかもおもしろいかなと思っています。

2つ目は、海の世界資源は生態系、常に変化して、成長しているわけですが、その変化していく様子を来園者と一緒に見守って、育てていく展示の実現というのはおもしろいだろうと思います。そうした水中のすばらしい環境を再現することによる、守るべき自然

があるように実感させることができると考えております。具体的には、海の草と書く「海草」あるいは海の藻と書く「海藻」などを展示して、成長する姿を見てもらう。あるいは珊瑚礁なども、最初は小さくてほとんどわからないような展示ですが、徐々に育っていく姿を来園者と一緒に見守っていく、みたいなことを目指したいなと思います。

最後になりますが、東京の海の展示は、これはもう絶対にはずせないと考えております。陸地面積では47都道府県中45位の東京都ですが、排他的経済水域では日本の45%を占めています。温帯域の東京湾から伊豆七島、熱帯域の小笠原まで、多様性に富んだ海域、東京ローカルとでも名づけて、そこに焦点を当てた展示ができれば面白いかなと思います。

また、水循環のことを考えるなら、奥多摩から東京湾までも加えたいなと思います。それから、陸地と海域の境目、岸辺であるとか沿岸とか汽水域とか、そういったところ、陸地と海の境目をどう展示するかも非常に面白いと思っております。

以上、雑駁ですけれども、私どもの考え方を述べさせていただきました。どうもありがとうございました。

○西座長　すごいスピードで説明されて、ついていだけでちょっとあれだったのですが。それから今の園長の話は、ぜひ資料として皆さんにお配りしていただくほうがわかりやすいと思いますので、ぜひいただければと思います。

それでは、議事を進めていきたいと思っております。本日の進め方ですが、説明資料1のところに、1から6までございます。このうち、1から3までを12時をめぐりに、「ミッション／ビジョン」「4つの機能」「展示・飼育について」を12時ぐらいまでをめぐりに。それから、そのあと残りの4、5、6を残りの30分、12時半までというような形で、3までを今から、ちょうど1時間半ございますので、ほぼ30分ずつという形でやっていければと思っております。

これまでは委員の皆さんに順に1人ずつお話していただいていたのですが、それをやっているとしても時間が足りないと思っております。それから、今、事務局のほうから説明していただいたように、このことについては各委員の方々のところに事務局の方が行って、ご意見を伺っていますので、各項目についてご意見のある方が挙手していただいております。ということで進めていきたいと思っております。

それから、これだけ資料がございますので、できればどの資料の何ページが関連しているということをおっしゃるとわかりやすいかなと思います。ただ、そういうこととはなくても、これが言いたいということがあれば、もちろん結構です。

というようなことで進めていきたいと思っておりますが、まず「ミッション／ビジョン」について、11時ぐらいまでお願いしたいと思っております。どなたかご意見ございませぬでしょうか。

○鳩貝委員　私が事前の打ち合わせの中で申し上げたことの1つなのですが、こちらの大きい資料の2ページの、(2)のビジョン④の「来園者の五感を刺激し」という「五感」という言葉はあまり教育の世界でも使わなくなっているの、「諸感覚」と申し上げたつもりなのですが。

○木下副座長 字が全く違うわけですね。

○鳩貝委員 諸々の感覚。「諸感覚」。

○西座長 この字が間違っているのですね。非常に重要なお話だと思います。

ほかにいかがでしょうか。

○佐藤委員 恐らくミッションやビジョンの議論をする、あるいは今回いただいた資料の中に、説明資料2の(4)にパーパスというようなご意見も出ておりますが、いずれにしても、結局、こういう施設が最終的にどのような世界を目指しているのか。この施設があることによって、世界がどのように変わるのかという、その大きなビジョンと、そのビジョンの達成のために私たちはこういうことをやるのだという、その2つに分けようというのは、実は私が提案しておりましたことで、説明資料2の2ページ目に、こういったビジョンがこういうふうに羅列されるのではなくて、上のほうですが、目指すものとしてこういうこともある、こういう社会を目指しましょうというのがある。そのために具体的にこういう取り組みをするのだという、そのビジョンとミッションの整理の仕方があるのではないか。目標をビジョン、あるいはパーパスとしておく。それに対して、それを達成するために何をすべきかということについてが使命、ミッションであるというふうに整理すると、わかりやすいのではないかとというのがこの提案でございます。

やはり、大きな枠組みで捉えるということが今後30年の水族館のあり方を本気で議論するときには必要不可欠であろうと思いますし、そのためにはSDGsとか人々のライフスタイルの転換であるとか、そして最終的に東京の歴史や、あるいは海と人とのつながりが次の世代に継承されるといったことが、最終的にこういう施設が世界に先駆けて目指すべきことであろうと思います。特にSDGsとか人と海のつながりの、言ってみればトランスフォーメーションですね。単に変化するのではなくて、本当に転換するという、人間の感性から生活から、全てが転換するような、社会の転換を促すような施設なのだとこのところをビジョンにうたう。具体的にやるべきことは、非常にある意味ではこの議論を通じて鮮明になってきたのではないかと思います。

特に大きなポイントになるのは、教育あるいは学びの部分が水族館の非常に重要な機能であり、そのためにさまざまな調査研究や展示がデザインされているという、そのような全体像が見えてくるようなビジョンのステートメントが必要なのではないかとこのように考えて、このような意見を述べさせていただきました。

○西座長 ありがとうございます。ビジョン、ミッションについて、枠組みから大きく整理したほうがいいのではないかとのご意見でした。今のご意見に対して何か、いかがでしょうか。

○木下副座長 そもそも、きょう何をやるのかというのが、その目標を明確にしたほうがいいような気がするのですが、多分、2時間でこれを全部やるのはとても無理ですよ。最初の1番は決定的に重要だと思うのです。今、佐藤委員がおっしゃったことは本当にそのとおりでと思うのですが、何のためにこの葛西臨海水族園の今、これからを考えている

のかということですよ。

そうすると、この水族館が何を目標に、何を変えることができるのかという目標を明確にすべきだと思うのです。何で今、こういう検討委員会というのができたのかというと、現状このままでは行き詰まるという現状認識の上で、この機会により望ましい水族館像をつくろうということだと思うのです。だけれども、一方で現実というのはあるわけだから、目標を明確にして、その目標に向かって何をするのか。具体的にそれはどういう方法でやるのかという、この3つだと思うのです。方法というのは運営だとかそういうところで、このあと考えていけばいいと思うのですが、ですから、水族館という施設がこの社会の中で何を達成しうるのかという、これをまず検討すべきだと思います。

ですから、この資料の2ページは、ミッション、ビジョンというような分け方をしていますが、必ずしもこのとおりではなくてもいいと思うのです。パーパスという言葉のほうがより明確な感じもしますし。ミッション、ビジョンという順番も、よく使われている言葉ではあると思うのだけれども、ちょっと漠然としていて、もっと明確にこの水族館が何を実現させるのかという目標を示すことかなと思います。

その上で、これまでの議論で出てきたのが、グローバルとローカルという、この2つの柱というのは非常に有効ではないかなと個人的には思っています。東京湾のほりにある立地から、海洋、海の世界に目を向けていくことと、先ほど田畑委員長がおっしゃいましたけれども、東京であるということも決定的に重要なので、陸と海との関係を考えるというような、グローバルとローカルであるという、この2つの方向性を踏まえた上で、目標を明確にすることかなと。ちょっとまだまとまりませんが、今、そんなことを思っています。

○西座長 非常に重要なご指摘だと思います。事務局のほうで設定された時間割はそうなのですが、1から3までは比較的フレキシブルにやっているとしますので、まず、今お2人の委員の方からご指摘があったような、目的と手段、ミッション、ビジョンについて、目指すべきもの、あるいは実現すべきものということについて、もう少しご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

○小林委員 なかなかミッション、ビジョンをどういうふうに構成するかというのは難しい問題だと思うのですが、確かに今、割にミッション、ビジョンという書き方、2段論法で、というのは多いと思うので、私はこの説明を事務局からもらったときに、特に違和感なく思いました。ただ、佐藤委員がおっしゃっている、ご提案いただいたこともすごくわかるのです。

1つ、私が今、これはどうかなと思っていることが、引っ掻き回すようなことになったら大変申しわけないのですが、ミッション、ビジョン、プロミスという言い方が今、結構、博物館、美術館で多いかと思うのです。すごく大きな視点で考えることも重要なのですが、例えば都立であるべきなのかどうかというような、この水族園自体が持っている、それは外見的なミッション、これをやらなければいけないというようなことは行政機関としてあ

ると思いますので、そういったことも含めたことがミッションとして掲げられ、ビジョンとしてはここですごく議論されているような、もっと大きな視点ですね、グローバルな視点とか、本当に目指すべきこと、この水族園がやることによって社会がどう変わるのか、人々の考えがどう変わるのかというすごく大きなことを端的にあらわして、そのために何をするのかというような、佐藤さんがまとめていただいた、以下に取り組みますということが、プロミスがいいのかわからないのですけれども、やるべきことというふうな論法にするというのが、割にじっくりくるのかなという気が今しております。

○西座長 そうすると、佐藤委員が言われたような分け方でやっていくということ。

○小林委員 それを3つに……。

○西座長 3つに分けるということですね。

○小林委員 ミッション、ビジョン、プロミスで、ミッションでかなり具体的な規定ですよ。どんなことをやるのかという、葛西水族園の置かれた立場に即したものがあって、ビジョンというのはもっとものすごく大きな、今、佐藤委員が言われたような、それこそいろいろな考え方とか世界のあり方を転換するような、大きな、向こう側にある目標をあらわして、そのことを最終的に目指すために水族園が何をするのかという論法にすると、かなり整理されるのではないかと思ったのですけれども、いかがでしょうか。

○西座長 わかりました。非常に有益なご意見だと思います。

いかがでしょうか、ほかの委員の方々は。

○佐藤委員 よろしければもう一言だけ。多分、この委員会の今までの議論の中で、非常にはっきりしてきたのではないかと考えていることは、水族館という施設が本来持っているポテンシャルというのは、実は今まで考えていたよりもはるかに大きい可能性がある。例えば100万人の集客が年間にあるとしたときに、その人たちが適切な体験をし、世界観を変えるというふうなことが起こったときの社会的インパクトというのは、実はものすごく大きいのだということに改めて確認して、大きな社会的インパクトを起こせる施設として、最終的にどんな方向に行きたいのかというビジョンと、具体的にそのためにどんなことをやるべきかというミッションと、本当にこんなことをやるのですよというプロミスがあるというふうな再整理は十分可能だと思います。

ただ、今、あえてこれを発言させていただいたのは、要するに水族館のポテンシャルというのは、単なるレクリエーション施設でもなければ、単なる東京都のランドマークでもなくて、本当に社会を変え得るのではないかとこのところを改めて確認したいというふうに思った次第です。

○西座長 今のご意見、あるいはこれまでの……。どうぞ。

○池邊委員 社会を変えるというのは、私も非常に大事だと思うのですが、例えばこの水族館をこれからリニューアルしていく、あるいは研究についてもそれなりの投資というお金がかかる。そこに多くの人たちの賛同を得るといったようなことが必要なわけですよ。

そこでやはり私は、日ごろ学生たち、私はどちらかというと植物生態をやっている学生

たちを相手にしているわけですが、動物園とかに連れていく機会があるのですが、動物園だと比較的楽なのですが、水族館にも地方に行ったときにたまに連れていくことがあるのですが、やはり食いつきが悪いという変なのですが、そこら辺で、実は私、今、公園のリニューアルとか再生とかをやっているときに、今まで公園に来たことがなかった人、「公園なんか好きではないよ、そんなところは植物が好きな人間が行けばいいんだよ」と言っていた人たちをいかにして公園に引きつけるかというのが今の私たちの課題なのですが、水族館もそんなことが言えるのではないかと思うのですね。

私なんかも、きょうここに集まっていらっしゃる方、私はいつも学生たちに言うのですが、「きょう、みんな来ているけれども、大体自然が好きな人だよ」と。自然が好きな人が世の中みんなだと思っていたら、これは大間違いだよと。同じ10億円の予算があったら、それを自然に使うと言ってくれる人は2割いればいいかなという感じだと思う。そうすると、その8割の人たちを、葛西臨海の今後の価値に賛同していただくというところが、ポストオリンピックの時代に、葛西臨海が世界に打って出ると。それが東京の今後の政策にとってもプラスだというあたりですよ。そのあたりが何で見せられるかというあたりを少しミッションのところにも、今まで海洋生物で、要するに日本というのは漁業国でありながら、漁業に対する理解は多分農業よりも少ないのかなと。漁業に携わっている人間も、まだまだ世界の海洋国に比べると、日本というのは四辺を海に囲まれていながら少ない。それから、海洋の研究に携わっている人の数も少ない。では、そこをどうこの、葛西がどういう役割を果たせば、そういうところにフォーカスできるのかというところを、もう1つ、先ほどの社会という、ライフスタイルというようなところで、そのあたりを少し掘り起こしていかないと、水族館のあり方というのが、要するにパンダを見せるというようなあり方と、多分、今、我々が考えているこの葛西臨海に対する考え方というのは、今、佐藤さんがおっしゃられたように変わってきている。だけど、それを第三者というか、経済や社会の中で生きている人たちにどう理解してミッションを伝えるのかというところがなかなか、そこが多分、私はとても大事なところであって、だからこれだけの巨額の投資をしても、水槽をかえて、これから30年、50年、いい水族館をやっていくことが東京都にとって非常にシティセールス上でも大事だと。何かそういうような視点をやはりミッションの中の一部に掲げないといけないのではないかなというふうに思います。

○西座長 今の視点から言うと、挙がっているミッションの中にはそれがまだ欠けていると。

○池邊委員 そうです。欠けているのではないかというふうに。

○西座長 私はいつも本音と建て前というあれをするのですが、本音のところかどうか、広く一般の方に賛同いただくためにはそういうことが非常に重要なと思います。

それは、個人的なあれですが、展示のときにどういうふうにあらわしていくかということが一番わかりやすいというか、具体的にかかわってくるのではないかなという気がしますけれども。それをミッションの中にどういうふうに入れ込むかということですね。

ほかにはいかがでしょうか。

○川廷委員 1つ、ミッション、ビジョン、プロミス、すごくいい振り分けだと思うのですが、これをまず誰に伝えるのかということが言葉をつくる上でも大切なのかなと。

つまり、これを広く、多くの人に伝えるものにするのか、それともこのステークホルダー、関係者の心にこれを刻んで、それをさっきおっしゃったように展示であったりプログラムであったり、そういったことで表現することで、ミッション、ビジョン、プロミスを具体的に一般の人に伝えていく、多分、そういうことだと思いますので、一番大事なのは、ここで働く方々がこのミッション、ビジョン、プロミスを自分のものとして、言葉として刻んで、そこからいろいろなものを創発していくきっかけづくりになるようなものが一番大事なのではないかなというのを、今、皆さんの話を聞いていて思いまして、その言葉を預かった職員の方とか研究者の方が、葛西という姿をつくっていくことになると思うのですね。

それをいろいろな方々が体験することで、メッセージを自分のものとして受け取って、それがライフスタイルに影響を与えていくという、多分そういうストーリーをちゃんと我々のほうでしっかりと考えて、言葉を設計してあげないと、一番大事なのは働いている方々のモチベーションだと思います。さっきのポテンシャルというのはおっしゃるとおりだと思っていて、僕も今回こうやって水族園についていろいろと勉強させていただいて、果てしないポテンシャルを実は感じています。大海原のような。それを本当にどうやってこの葛西で表現していくのかというのを、逆にそういう表現をするのは多分、そこで働いている方々が具体的にしてくれるのだと思うので、そこを応援できるような言葉をここで検討できればいいのかなというのを、そのぐらいの印象だったのですが、思いまして。

あと1つ。さっき館長がおっしゃった夢というのも大事だなと思いまして、深海とか大海原とか遠洋というのですか、そこで見えないものを伝えていく、見せていく夢という、海はまさにそこなのだろうなと思いました。そういうものを感じられたらいいなと思いました。

○西座長 ほかにはいかがでしょうか。

○海津委員 きょうは言葉がたくさん出てきているので、どう整理していくのかということで、眺めながらうなっていたところなのですが。ミッション、プロミスとかいう言葉が出てきて、今のお話のように、どなた向けにするのかということが見えてきたと思います。整理の方向性として、ミッションとか役割というのかわかりませんが、これは恐らくこれから先の葛西の「宣言」になると思うのですね。「これからの葛西は」というのが頭について、こういうふうになりますということで宣言できるようなものに、1つにまとまっていってということが望ましいのかなというふうに思いまして。

ここに挙げていただいているように、社会の機運を醸成するとかいうのはあるとは思いますが、これはもう当然のことなので、あえて書かなくてもいいぐらいの大きい言葉をもう少し上に乗せるということかなと。

そのときに、先ほどの館長さんのお話で、今、川延さんがおっしゃったのですが、柱としてこの2つのかなと思ったのが、1つは海の深さ、広さ。東京の海ということで、未知の世界であるところの海の世界というのはこんなに広いし、こんなに深いし、こんなに魅力的なのだよということを伝えていきたいということが1つあって、それから育てる水族園という話もされていて、育てるということは、行った人たち1人1人が海の生き物とかかわりを持つということだと思うのですね。そういう海の生き物と自分のかかわりがここでつくられるということなのかなと思いました。そうやって大きい目標の中に、この葛西はあるのだということをやさしく1つにまとめていくということかなと思いました。

先ほどのプロミスというのは、アクションプランなのかなと思ったのですが、アクションでありプロミスでありということで、実現するべきことですね。

あともう1つ、佐藤先生がおっしゃっている持続可能な開発目標、SDGsなのですが、今は大事なのですが、2030年で一応終わるのですよね。この言葉をミッションに入れてしまうと、これから30年間のなかで終わってしまっているということがありますので、持続可能性というのはこれから先もずっと使われる言葉だと思いますが、SDGsに縛られないようなミッションがいいかなと思いました。

○西座長 ありがとうございます。あまり具体的に言うてしまうと、時間が過ぎるとちょっと古い感じにもなってきます。そこは非常に慎重にやらなければいけないのではないかなと思います。

いかがでしょうか。

○鳩貝委員 非常に大きな話で、どこから食いついていったらいいのかと困っているところです。先ほどもお話がありましたが、これを誰に向けて発信するのかというのはすごく大事なことだと思います。先ほどの話にありましたように、水族園の機能等々をあまり理解されていない方もいらっしゃるということで、そういう都民にもっともっとわかりやすく理解してもらえるように書くのか、それとも、より良い水族園をつくっていくために、行政、最終的にオーケーを出してくれる議員さんも含めて、そういう人たちに訴えかけるようなものにしていくのか。まず、庁内ないし議員さんたちに理解してもらえるようなもの、その後、より具体的な都民のものにすることもあるかと思っています。

あまりにも大きくて、漠然としていて、具体的なことがあまり見えないようになってしまってもまずいだろうと思いますので、もう一度改めて、このミッション、ビジョンも含めて、誰に発信するのかをもう少し明確にしていくということのかなと思いました。

それと、先ほどから、園長さんの話も含めて、臨海水族園のことが海の中だけではないのだという話も出てきました。ですから、このミッションの一番最初のところで、「海の中の素晴らしい」と限定して使っているのだからかというふうに私は疑問に思ったのですね。これがずっと後に引っ張られていくとすると、ここは何かネックになってこないかなというふうにも感じて、何か別の表現がないだろうか。これは多分、非常に大きな問題だろうと思うのです。具体的なことになる、海がこれにかかわるからということでもいいのかも

しれないですが、最初のところで海というだけでいいのかなというのが、ちょっと気になったところでございます。ではそれにかわる言葉は何があるのか、私も思いつかないのですけれども。そんなことを感じています。

○西座長 今の最後に言われた「海」というのは、説明資料2の1ページの上から2番目にそのことが、ミッション①で「海に限定せず、川や水も含めた表現とすべき」だということで、水圏、水界というような言葉が出ています。

私もこういう仕事にずっと携わってきて、海に限定すべきでないというのはもちろんだと思います。今回も田畑園長のほうから、奥多摩からというふうな話も出ていますし、当然、水の世界全部を含むと思うのです。

ただ、なかなかそのいい言葉が、いつも悩むのですね。ですから、私個人的には海というもので表現しておいて、補足でそれをやっていくのだというのが、海にかわるロマンとか科学を含めた言葉というのはなかなかないのですよね。と、思います。

○木下副座長 海という言葉は捨てられないですよ。だけど、柱としては今、海と水というのが両方出て、やはり海は、先ほどから大海原とか海洋だとか深海だとか、もう本当に地球にずっと広がっていく方向性を示していますし、それから水というところにもう1つ視点を向ければ、川だとか、本当に汚水の問題も含めて、環境問題というところにも入っていくので、この2つのポイント、どういう言葉でくるかは別としても、これだけは大体共通理解はできているのではないかと思うのですが。

だから、その場合に、水族という言葉を使うのかどうかというのも、多分、これはだから、ミッションなりビジョンがはっきりしていく中で、それにふさわしい、この新しい施設の名称は何かというところ。水族園でいくのかどうかというのは当然検討すべき課題かなと思います。

○佐藤委員 今のお話で、やはり僕は、海とか水族とかいったものは、やはり入り口ではないかと思っただけで、まさに水族館が提供できる非常に魅力的な入り口がそこで、そこから人と自然との関係を改めて見直すという方向に多くの人たちが関心を深めていただけるような、そういう入り口としての魅力を持ったものであればよろしいのではないかという気はいたします。

それから、先ほど来議論になっている、このミッションとかビジョンとかいった文言を誰に向かって伝えるのかというときに、恐らく非常に重要なポイントは、ありとあらゆる人に向かって伝えるということではないかと思うのですよ。つまり、最終的には多くの方々がこの水族館というものとそこに描かれている海の世界というものを入り口にして、自分自身の考えを深めていくというプロセスがここに描かれているというわけですし、そのときには全ての人たちがこの水族館というものを材料にして、素材にして、学ぶのだという、そういうプロセスが描かれているといいのではないかと。

つまり、今日はあまり強調されていませんが、水族館の非常に重要な機能は、やはり学びにあるだろう。それは、水族館が世の中のそういったものに関心がない人に何かを教え

るという意味の学びでは全くなく、水族館というものを1つのきっかけとして、海というものを1つの入り口として、水族館に働く人も、そこに関係する私たちのような人間も、そして訪問なさる方々も、全員が学ぶ。そういう場面であるというふうな発想が大事なのではないかというふうな気がします。ですので、学びの部分を改めて強調するというのは、非常に重要なことではないかというふうには思っております。

○西座長 かなり議論が深められたのではないかと思います。この場で具体的な言葉をやるのは時間的にも難しいと思いますし、まだ次に4回、5回の会議もありますので、今いただいたようなご意見をもとに、事務局のほうで次回に向けてまとめていただくというのでよろしいですか。

どうぞ。

○川廷委員 もう1回、言葉のお話なのですが、例えばミッション、ビジョンといったものは企業で考えたときに、一般の消費者が、企業のミッション、ビジョンを知っているかという、知らないと思いますね。大事なのは企業のメッセージだと思うのです。例えば、トヨタであれば「FUN TO DRIVE」と書いてあります。それが消費者には届いているわけです。そこはミッション、ビジョンの1つの表現としてコピーにしているのですね。スローガン、ステートメントですね。ですので、やはりそこは丁寧に整理したほうがいいのかなど。

おっしゃることはよくわかるのですが、どうやって一般の人に伝えるか。ミッション、ビジョンが例えば10行書いてあったら、10行はさすがに人はわからない。でも、働いている人にとってはそれがすごく、1つ1つが教訓として心に刻まれるので、やはりそれはまさに第1次のステークホルダー、もちろん関係者も含めて、これを形にするのだというためのものがミッション、ビジョンであって、具体的に来る人に対しては、それをさらに伝えられる、子どもでも大人でもわかるようなすてきなメッセージが、先ほど宣言というふうにもおっしゃいましたけれども、何かそういうものから考えていくといいのかななど。

そこら辺のことをうまく、ターゲット設定というのはすごく重要で、志は非常に熱いのですが、全部伝えきれるかという、我々だってこの資料を読み込むのは大変な状態ですので、その整理はやはりやったほうがいいのか。だから、よほどその辺の整理をして、いい言葉、いいフレーズを、この委員の中からエッセンスを提案できればいいのかなと思いました。

○海津委員 いいですか、補足で。大学でもこういうポリシーみたいなのはしょっちゅう書かされているのですが、そういう作業をやるときに、1つ、入れられるならやってみたらどうですかというのが、英語に置きかえてみるという作業ですね。英語で書いてみると、言葉も格好良くなりますし、太文字で書くところ、丸文字で書くところ、結構整理されてくるのです。それと、いれこにならなくなるという利点もありますので、得手不得手はあるかもしれませんが、ちょっとご提案させていただきました。

○西座長 優秀な事務局は多分やと思います。

ほかにどうですか。

○千葉委員 おくれてきて申しわけございませんでした。追いつくのがいっぱいだったのです。

先ほどからお話の中で、やはりプロミスというところが将来、観光客だとか来訪者に本当のお約束ですよ。その部分で、ポストオリンピックという言葉が先ほど出ましたけれども、やはりアフター五輪ということで、例えば大阪ではカジノができたりするのでしょうか。そうしたときに、来訪者に愛されるような施設であるということを確認する、プロミスする、というところがすごく、恐らく誘客につながっていくのかなというふうに感じました。

事前説明の資料はきょう配付されているのかどうか確認しきれず、事前にご説明いただいたときにいただいた海外の、諸外国の水族館の資料の中に、モナコ海洋博物館のところに「知ること、愛すること、守ること」というふうな、短くて訴えかけるような表記がありまして、やはりそういったところを約束してあげることが、カジノには行かない方たちを多く取り込めるのかなという印象を受けました。

○西座長 海外の水族館の、きょうはここには入っていなかった？

○小林課長 事前のとき、本当に参考としてお渡しさせていただいたもので、本日はお配りしてございません。

○小林委員 誰に向けて書くのかということは、もしかしてここで整理したほうがいいのかないという気がするのですが、博物館、美術館ですと、最近リニューアルしたとかオープンしたようなところは、ほぼですます調で、かなり平易な言葉を使って、例えば県の美術館であれば県民に訴えかけるような調子で書いているのが、変な言い方ですけども、トレンドかなという気はいたします。

それが、それこそ長い目で見ていいのか悪いのかよくわからないのですが、今、かなり皆さんから誰に向けてというのが出てきたので、そこはそういうふうにするのか、今、割に、本当にステートメントとして、というような書きっぷりだと思うので、どちらがいいのかというのは悩んだほうがいいのかもしいかなと思います。

私は、やはり皆さんに向けて出すもののほうがいいのかないかなと、これからの時代は。例えば「来園者の諸感を刺激し」というのも、それこそ、もしかすると「皆さんの」というぐらいのところまで飛んでしまったほうがいいのかもしいかな。そこはなかなか結論が出ないのですけれども。そういう書きっぷりに変えたほうがいいのかという気持ちが皆さんにあるから、誰に向けてなにかという発言が先ほどから続いているのだとしたら、そこだけは根本的に何か視点を変えてもいいのかなというふうに思います。

○西座長 ありがとうございます。では、事務局のほうから今回のこの委員会の役割というか、それから最終的な報告書がどういう人に対する報告書なのかということ踏まえて、今のご意見についてももしお答えできるなら。

○小林課長 事務局のほうから、今、明確にという答えは申しわけないですが、持っていない状況でございます。ただ、これまでにご議論いただいた中で、やはり多くの方に葛西に足をお運びいただきたいというところが、まさにこの検討の入り口だと思ってございます。ですので、内部の者に対してというよりは、やはり一般のお客様に対してどのような訴えかけをさせていただけるのかというのが大事ではないかと思っております。やはりそこも含めて、できれば委員の皆様で方向性はやはりこちらではないかというのをいただければというのは思っております。

○西座長 わかりました。では、どういたしましょうか。先ほど川廷委員のほうから言っていたような、働く人たちにとっての指針というか憲法というか、そういうものと、それから一般の人に対するものは別だという……。

○川廷委員 のほうがわかりやすくいいのではないかと思います。

○西座長 それはよろしいですね。そういう考え方で。それで、働く人、あるいは関係者、企業だと自分たちの会社のあれにという、そういうものをまず考えて、それで、それを外に出すときにどういうふうに柔らかくしていくかという2段階で考えていただくと。とりあえずは、まず中で考えるものからという。やはり外に出すのは、かなり検討しないと難しいので。

ということで、次回までにそういうものを、きょうの意見を踏まえて整理していただくということでいかがでしょうか。

○川廷委員 外に出す言葉は、1つは実現する社会みたいなものが展望できるような、それこそ夢とかロマンを感じるような言葉がいいと思うのと同時に、葛西が提供できる価値は何なのかというのをわかりやすく伝えられるような、ポイントを考えながら言葉を開発すればいいのかなというふうには思います。

○西座長 よろしいでしょうか、そういうところで。一番難しいところだと思うのですよね。この、ミッション、ビジョン、ここがしっかりしないと、あとがぐらぐらしてくるところがあるかと思えますけれども。

では、まず第1のミッション、ビジョンはここまで。一応、次に行かせて……。

○小林課長 1点だけ確認をさせていただければと思います。まとめ方でございますが、まずは中に向けてというところでまとめつつ、外の方に対して夢とか価値提供をどうするかという形かと思いますが、中に対してのまとめ方、今はミッション、ビジョンというふうにさせていただいているのですが、先ほど来、ご意見をいただいておりますが、ミッション、ビジョン、プロミス、どのようなやり方がありますとか、まとめ方をどういうようにイメージしたらよろしいかというところまで、少しご意見をいただけないかと思えます。

○西座長 それは、ミッション、ビジョン、プロミスというあれが出ているので、それでよろしいのではないかと思いますけれども。

○小林課長 わかりました。

○西座長 よろしいですね、それで。

○川廷委員 もちろんです。

○西座長 では、次の「4つの機能について」お願いしたいと思います。説明資料は3ページです。これについていかがでしょうか。

○鳩貝委員 座長から、2段階に考えるということで、先へ進めるということだったので、私はこの4つの「教育」「レクリエーション」「環境保全」「調査・研究」は、まず第1段階ではこの言葉でいいと思います。外へ発信する場合には何か考えなければいけないけれども、我々が考えていくのは、内部的にどういうものをつくっていくかであり、さっきのミッションの中では、これでいいのではないかと思います。ですから、外へ発信するときには、例えば「教育」をどういうふうに変えていくのか。「調査・研究」は、多くの人たちにもっとわかりやすい言葉がないかを考えていけばよい。この中のことについて、これでいいのかどうか少し議論していく必要があると思います。ある程度難しい言葉があっても、この段階ではいいのかなと思います。

私は基本的に「教育」が重視されていく、それは学校教育だけではなくて、生涯教育、生涯学習の視点として非常に重要だし、先ほど話もありましたように、これからの社会を変えていく大きな力になる場なのだとすることを重視していくというのは変わらないだろうと思います。

今まではどちらかというと「レクリエーション」の場が非常に重視されてきたかと思いますが、それでも「教育」のほうに重点を置いて、ここに書かれているようなことを進めていくということ。それから「調査・研究」が一番大事な部分ですので、あとのところにも関係しますが、研究機関的な位置づけを明確にして、そこで働いている人たちが大学等々の研究機関とも連携しながら、自分たちでもキャリア形成といいたいでしょうか、仕事そのものが前に進んでいく、発展していくような位置づけになるといいかなというふうに思います。

具体的には、例えば学位がとれるような研究をどんどん進めていけるような場にするとか、働いていく一番基礎的な「調査・研究」する人たちのやりがいのある職場にしていくことが、より中身の濃い、いい施設になる基本ではないかなというふうに思います。

○西座長 ありがとうございます。今の、この言葉でいいというのは、例えば「教育」を「学び」に変えたほうがいいのではないかということは外に出すときに考えればいいことであってということで、教育の機能というふうに考えるのはこれでいいだろうということですね。

ほかにいかがでしょうか。

○佐藤委員 まさにおっしゃるとおりだと思うのですが、この4つの機能の中で、今までの議論では明らかに「教育」が非常に重要である、学びの部分が重要であるというところはほとんど皆さん共通になるお考えだという状態になっております。そういうふうに考えたときに、恐らくこの4つの機能の相互関係というか、ここでは「力点の置き方」というふうに書いてありますけれども、これは力点というよりは恐らく4つの機能がどういふ

うにお互いに関係するかという話だと思うのですね。

最終的に、水族館というものが多くの人たちにとっての学び、教育の機会を提供する。それは学校教育だけではなく、都民に幅広い社会教育の機会を提供することを1つの重要なミッションとするのだとしたら、そこに伴うであろうレクリエーション機能というのも最終的には教育的な機能に資する「レクリエーション」の機能を持たなければいけない。「調査・研究」というときに、今までの水族館の調査・研究というのは、ある意味では飼育と展示の研究をやってきたわけですね。そうではないだろうということになってきますよね。つまり、本当は教育に関する研究、どのような人材育成を図るのかといったところの、要はソフトウェアの教育に関係するような研究が非常に重要だということになります。そして、「種の保存」とか「環境保全」に関しては、これまた今までの議論の中で非常にクリアになったことですが、教育活動というものが実は環境保全活動である。「環境保全」の重要な要素が教育活動なのであるというふうに考えて、まさにそこに力点を置く。そういうふうな構成を明瞭に示すのが大事なのではないかというふうに、改めて、つくづく思います。

○西座長 それぞれの関係をどういうふうにしていくかということだと思います。

○池邊委員 今、教育でまとまりつつあるのですが、私はやはり学びと育むという言葉が必要かと思っていて、やはり教育と言ってしまうと、どうしても一般的には、生涯教育と言う言葉もありますけれども、どうしても子ども向け、あるいは教育という上から教えるという感覚が非常に強いと思うのですね。

今、皆さんのミッションのところに出てきたのは、新しいライフスタイルとか、あるいは先ほどの諸感、そういう言葉を考えると、やはり育むという、そういう意味では大人でも子どもでも、ここに来て初めて、それこそ諸感を研ぎ澄まされて、そこからいろいろな感性や想像力やさまざまなもの、教育と言うと何かちょっと想像力という部分まで我々は含まれていると考えるのですけれども、普通、教育と言うと、非常に学校教育のあれが降りていて、そこに、感性の感覚であったり、あるいは文化とか風土とか、そういうものも含まれているという感覚が少ないので、学び、育むというような言葉があるといいのかなと感じがいたします。

○西座長 裏表かと思っていたのですけれども、それではないニュアンスもあるということですね。

○池邊委員 そうですね。

○西座長 いかがでしょうか。

○小林委員 今の言葉の問題、よくわかるような気もするのですが、逆に言えば教育はそれだけではないのだよという、上からの押しつけだけではないのだよということを一生懸命言っている時代かなという気もするので、ここは、ただ項目としては教育でもいいのかなと。下のところで、また何か工夫すればいいのかなと気も私は個人的にはします。

1つ、私、事前説明のときに申し上げられなかったのですが、教育の項目の中にならぬ

る社会包摂の考え方がもう少しはつきり出たほうが……。

○西座長 社会何ですか。

○小林委員 社会包摂です。インクルーシブという、今すごく言われておりますけれども、とても重要なことだと思いますので。

例えば⑦の具体的な文言でいいますと、「移動水族館で」という、これはとてもいい試みだと思うのですが、少なくとも「などで」と、済みません、役所的で、とかですね。私としては例えばの提案なのですが、これまでの水族園等の利用機会の少なかった人々に向けたプログラムやシステムの開発といったことを目指すということを明確にしてはいかがかかなというふうに思います。つまりは、視覚障害だったり聴覚障害だったり、それこそ本当にもっと、認知症のケアに水族園とかすごく有効だと思いますし、そういった視点も含めて、それこそ広い意味での教育に取り組むのだという姿勢を明確にしてはいかがかと思います。

○海津委員 今おっしゃられたこととほぼ同じ意味かもしれないのですが、「調査・研究」のところの内容をもう少し幅を広げていくというのがこれからできるとよいなと思ってる点でして、今、恐らくこれは水族の飼育管理に関する研究ということなのですが、もっと社会的な役割に関するような「調査・研究」があつてよいと思います。生き物との接触というのは、先ほどもおっしゃったように癒しの効果とか医療面からも着目されていますし、ここから何が伝えられて、社会を変える人間が育つかという、これは教育なのだと思うのですが、あるいはインタープリテーションのような、そんな形での研究もこの水族園を舞台にしてできることだと思いますので、この「調査・研究」の分野を広げていくということができるとよいなと思います。

○西座長 非常に大切だと思います。全ての仕事というか業務というか、可能性に対して、その基礎となる調査・研究ということを進めるというか、それは必要だと思いますので。

ほかにはいかがでしょうか。

○木下副座長 この4つの機能については、これまでもここで意見を交わしてきたと思いますし、私自身は「調査・研究」これは対等かなというも疑問に思うのですよね。この4つの枠組みを踏襲していくのかどうかというのも検討してもいいように思うのですが。全てが重要なものであることは言うまでもないのですが、これまで動物園、水族館がずっと使い続けてきたこの4分類というのをこの報告書の中でも踏まえるのかどうかですよね。

「教育」というところを今、我々はすごく大きく捉えているというのは言うまでもないと思うのですが、全てのベースが「調査・研究」だと思いますので、それは報告書のつくり方になっていくと思うのですが、「調査・研究」を何か、これは確かに機能だから、この表現もあり得ると思うのですが、せつかくの機会なので「調査・研究」の扱いを別枠にするということもありかなと思います。

それから、やはり「機能」という言い方も、実はもう1つよくわからなくて、例えば展示はこの中に含めていいのか。例えば博物館や美術館の場合、博物館法で資料の収集、保

存、展示というような言い方で、やはり水族館は絶対捨てられないものは実物の展示なのだということを踏まえたときに、飼育展示といいますか、それは機能ではなくて手段なのだと言えはそのとおりなのだけれども、実物を見せていく場なのだという、そのあたりの問題も、そこは自分でもまだうまくおさまらないのですが、博物館というものが今後さまざまな映像だとか情報というものに依存していく中で、本物を見せ続ける場なのだという覚悟みたいなものを示すことも、それはもう少し前のビジョンなのかもしれないですけども、そんなことを今、思っています。

いずれにしても「調査・研究」というのは、この機会に別枠にするというようには思うのです。

○川廷委員 今、すごくヒントになったのですが、さっき言った提供価値ということ考えたときに、飼育も展示もそれぞれ独立したものに感じますし、調査・研究もそれぞれ独立したもののようを感じるのですよね。

ですので、もしかしたら、これは今、羅列で議論をしているので、さっき佐藤委員もおっしゃったように、構造図というのですか、それを1回マッピングしたほうがいいのかというのは思います。「教育」というのはやはり全部の下敷きになっているような気がしますし、どういうふうにこれを表現するのか。そうしないと、この議論は出口のない議論になりつつあるような気がするのです。

本来なら、我々だと、これはワークショップをやってしまうのですね。みんなでイメージを構築して行って、最後にマトリックスとして、こんな構造図になりますねというので、そこから議論したりするのですけれども、多分、そんな時間はないので、事務局のほうでもご検討いただいて、構造図を1回、考えていただけるといいのかなと思いました。

○西座長 いかがでしょうか。

○木下副座長 もう1つありまして、「各機能の関係性」のところなのですが、説明資料2の3ページ(9)各機能の関係性というところで「レクリエーションは入口、教育は手段」この辺は多分、見直していかないといけないと思うのですね。まさに構造をどういうふうにつくるのかということ。

私はレクリエーションというのは入り口であって、目標だと思っているのですよ。この施設を訪れることによって、まさしくリ・クリエーションされるという。だから、やはり構造図というのは必要だなと思います。

それから、学びだとか育むという、そういう言葉。これを4つの機能のところ、今、問題にしているところにその言葉を充てるかどうかはまた別問題なのですけれども、そうしたときに、発見というのもすごく重要だなと思っておりまして、いずれにしても先ほど水族館というのは最初の入り口なのだという。それからずっと海、あるいは水の世界につながっていくというような、発見という言葉、あるいは気づきだとか、そういったこともどこかで使っていけるかなと思います。

○西座長 ほかにはいかがでしょうか。

○千葉委員 いろいろな議論がある中で「レクリエーション」というのが「教育」と「調査・研究」と同列であっていいのかどうかというところが非常に気になったのですが、ただ、この「レクリエーション」と、既に3ページで表記されている内容で「知的な体験」というふうにございますけれども、よく観光産業などで使われているのは体験的学びとか、そういった表現が多いのですね。知的というふうに、こちら側から言っているのかというところが、知的で間違いないのですが、体験的学びというような表現をしたりとか、あとは私、沖縄県に7年ぐらい委員で通っていた時代があったのですが、旅行産業とか観光産業のことを感動体験産業というふうに位置づけて、感動体験プログラムとか、そういった形の委員のメンバーをしていたのです。

漁業も観光資源だということで、ウミンチュですよ、ウミンチュという言葉はもう大分皆さんに知られていますけれども、糸満周辺でどういう漁業を行って、どんな色の魚が釣れて、というようなことを体験させるプログラム、ツアーを、ちょっと違った観光の商品をつくっている人たちとも一緒に委員をやっておったのですが、感動が味わえる場とすると③ですが、感動体験だとか、ここにはございませんが、交流だとか、もしくはレクリエーションの後にコミュニケーションがあってもいいのかなという感じを受けました。

昭和の時代の観光産業とは今後違ってきておりますので、言葉も考えたらよろしいのかなと思いました。

○木下副座長 いいですか、補足というか。これ、本当に昭和の言葉だなと思うのだけれども、何で動物園、水族館、これを使ってきたかという、やはり戦後の日本の社会の中での動物園の生まれ方というか、どう育ってきたのかということが絡んでいて、もう「レクリエーション」というのは、多分、今の言葉とは違う。やはり娯楽、レジャーだったはずなのですね。「教育」はもう社会教育施設であると。これは博物館法、社会教育法に基づいて。「種の保存」は少しおくれてここに加わってきたのは間違いないと思いますけれども。

だから、確かに枠としては生きてはいるのだけれども、目指しているものがもう随分変わってきているなという感じがしますので、この機会にこのところ、4つを踏襲しなくてもいいような気はします。

○佐藤委員 私もこの4つを踏襲する必要があるとは全く思っていないのですが、とりあえずの整理としては、これは便利であるという旨で使ってきているところがあると思います。先ほどのポンチ絵的なマトリックスで、これをきちんと整理して、相互関係を明らかにするという作業をした上で、実はこれ「ミッション／ビジョン」と切り離して考えるわけにはいかないと思うのです。

「ミッション／ビジョン」先ほど来の議論の中でプロミスないしアクションというすばらしいアイデアが出て来ていて、まさにこれはそれに当たりますよね。これ、全部、何々をすとなっている。だから、まさにそこにきちんと位置づけてこれを再整理するという作業をすれば、それはミッションとビジョンに照らして、葛西が考えるべき機能群というのがこのように整理されますというのが出せます。そのときには恐らく「調査・研究」と

いうのはかなりまた別の枠組みになってくるとか、そういった再整理ができるのではないかとこのように考えられますので、これはまた事務局の皆さんに申しわけないけれども、宿題かなと。(笑)。

○西座長 確かに、今、木下先生が言われたとおり、戦後ずっと使ってきた。いろいろな人から意見が出ていて、これは皆さん言われるように、関係性がほとんど整理されていないし、単なるお題目になっているのではないかと。ただ、動物園、水族館が単なるレジャー施設ではないというときの1つの盾というか、そういうもので4つの役割という言葉を使ってきたわけなのですね。ですから、おっしゃるとおりだと思います。

教育が社会教育というか、インフォーマルな教育というか学びであるならば、それをする人にモチベーションというか、それを与える必要があるだろうと。そこに楽しさ、レクリエーションがあるのだというふうに私は理解してやってきたのですが、そういう意味で、入り口ということを使ったのですけれども。ただ、レクリエーションそのものは非常に、レクリエーションというか楽しみというか、水族館を楽しんでいただくということも大きな目的ではありますので、そういうことを含めて、図にするのも大変だと思いますが、この4つの機能という題目は変えるということで、水族園の機能の関係性についてとか、あるいは先ほどから出ているプロミスについてとか、そういうようなことで1の「ミッション／ビジョン」に続いて、ここで具体的にどういうことをどういう関係でやっていくかというふうに検討していただければと思います。

よろしいでしょうか。

○海津委員 そのときに、次の項目の展示も本来含まれているべきだと思うのですね。この1、2、3を1つのマトリックスというかフローというか、そういう形にまとめたほうが良いと思います。

○西座長 実際には非常に関係していて、今までの議論を踏まえて、具体的にあらわれてくるのが展示であるということになるわけですね。それを支える技術が飼育であるということになるわけで。

皆さんのいろいろなご意見で、かなりすっきりしてきたのではないかと思います。

では、展示のほうに移ってよろしいでしょうか。

展示を考えるに当たってキーワードが出ているわけなのですが、これもまた議論がいろいろ出ると思います。4ページ、5ページにわたって展示のことが書いてあるかと思えますけれども、事務局のほうから、「ミッション／ビジョン」からピックアップしたキーワードと「集客の視点」からピックアップしたキーワードという形で、それを組み合わせて展示のコンセプト例が出ているわけですが、このことについてご意見をお聞きしたいと思います。いかがでしょうか。

○木下副座長 5ページで「現在の展示からイメージ」ということで、現状でもこれはやっているということですか。

○小林課長 こちら「展示コンセプト例」と書かせていただいたようなメッセージが発信

できているかというところでは、やはりそこまでは至っていないと思ってございますけれども、今、葛西にあります展示から、仮にこういうようなメッセージというのは伝えられるのではないかとこのところイメージをさせていただきました。

○木下副座長 だから、これに不足しているものがあるのかということと、それから、現状というか、これまでやってきたことが妥当なのかということも含めて考えるべきかなと思います。

私が一番すばらしいと思うのは、海藻の展示で、先ほど田畑園長もおっしゃっていましたが、一般には水族館という魚を見に行く場所だというふうにとらえられていると思うのですが、それだけではなくて、海を見せたいのだというふうにおっしゃって、海藻の問題というのはあまり考えない人が多いのではないかと思います。これはユニークだなと思いますので、こういったところはもっと展開できそうな気がするのですよね。

○佐藤委員 こういう形で、展示にキーワードをつけて整理するというのは、実は非常におもしろいと思って見ていたのですが、これはわかりやすく言えば、多分、展示というものが単に何かを見せているというのではなくて、そこからどんな意味を引き出すかということキーワードで表現しているように見えるのです。こういう整理の仕方というのはかなり新しいと思いますし、こういう整理の仕方展示というものを再構築していくのだよという、そのアプローチはいいと思うのです。

現時点で、私、事前の打ち合わせのときにも申し上げましたが、やはり質の違うキーワードが入ってしまっているよなという感じがしています。一応、ご提案させていただいたのは、これは、どんな展示でも絶対外せないキーワードと、ある特定の展示の中できちんと実現しておくのが必要なものと、両方が含まれているので、基本キーワードと個別キーワードという形で再整理させていただきました。そういう見方で見ると、全ての展示にとって必要なものというのは、例えば生物多様性とか海洋環境とかいったものは確実に必要だろうし、それ以外のものは、幾つかのものについてはまた別のものとして考えたほうがいいのではないかとこの再整理は要るだろうなと思います。

それから、全ての展示で確実に、何らかの形でメッセージが発信されなければならないようなキーワードに関しては、それぞれの展示ごとに、その展示でどのようなメッセージが発信できるかというのをかなり詳細に見ていくという作業が今後必要になるのだろうなと思っています。

○西座長 展示が1つの手段でもあるというか、そういう形になってくるわけですね。

○佐藤委員 展示は多分、何かメッセージを発信するための手段ですね。

○西座長 そうですね。メディアとして。

○佐藤委員 あと、田畑園長がおっしゃったように、本当に魚や生物のコレクションをやっているわけではないので、まさにそこに展示されているものからどのような意味を見る人が引き出すことができるかという、その部分が本当に大事な部分ではないかと思います。

○海津委員 種を見せるのか、つながりを見せるのかということがあるのかなと思って

おりまして、事前に説明にいらしていただいたときに、例えば東京にある水族館でもあるということで、先ほど館長がおっしゃったように、深山から流れてくる川の系あり、干潟での汽水域での水のやりとりがあり、一步海に出ていくと黒潮が流れているわけですね。その海流があった中での東京湾の魚たちというところで、1つの目の前に見えている生き物たちの中から、どういうふうなつながりがあるかということを見せる。これが大事なポイントかなと思っておりまして、クロマグロとかサンゴという物の名前を出してくるというコンセプトもあるだろうとは思いますが、それはちょっと図鑑的になってしまうので、そこから何を読み解いていただきたいかというところの全体の海のつくりとかシステムとか、それが読み取れるようなものがあると望ましいかなと思っております。

あとは小笠原の話も出ていましたので、島嶼の海、そこもポイントだろうと思います。結果的に見えてくる展示物とそう変わらないのかもしれませんが、その背景にあるメッセージとしてのところに、そのあたりも入れていただいたほうがいいかと思います。

○西座長 非常に重要なあれだと思えます。

○鳩貝委員 私、教育が重要だと言いながら、ちょっと矛盾するのですが、あまりお役所的に、お説教的な、かたい水族館になってしまってはまずいだろう。来てよかった、おもしろかった、びっくりした、それだけでもまずは大事なことなので、右側のほうの「アイドル性・スター性」こういうことに関しても、真剣に考えていったらいいのではないかと思います。ただ、今、海獣に関してのいろいろな問題もありますので、ほかの水族館等との差別化といいましょうか、違いは明確にしていく必要があるだろうと思います。

やはり「東京都が」という部分は非常に重要ですので、単なる集客だけではないのだけれども、でも集客力は考えなければいけない。そういう意味での「アイドル性・スター性」というのは必要だ。それが独自性ともかかわってくるのだと思いますので、あまりかたい、行くと「何か疲れたな」というのではなくて「ああ、おもしろかった」「よかった」「家族みんなで楽しめる」という部分を基本として考えなければいけないのかなと思います。みんなであまり真面目に考えすぎない部分も必要かなと思っています。

先ほど、レクリエーション、癒しという言葉もありましたが、やはり大事だし、それをどういうふうに関係性を持った方がいいのか、私のような古い人間には頭の中が整理できないのですよね。若い人たちは、この部分、すごくうまく立体的な図にしたり、わかりやすくビジュアル化できるので、その辺、ぜひ事務局にいる若い人たちのアイデアを大いに活用して、わかりやすいメッセージ性のあるものにしていただけるとありがたいなと思います。

○川廷委員 先ほど佐藤委員もおっしゃったように、先ほどの機能ですとか展示とか、そういったものを「ミッション/ビジョン」とうまく重ね合わせて導き出していきたいと思います。そこから多分、来訪者に対してのローガンみたいなものも出てくるのだろうなと思っています。

あと、こういったことのコンセプトがそれぞれパーツごとになっているのですが、多分、

展示に関するこれ全体のコンセプトが当然あって、それはもしかしたら今まで出てきている話と、例えば海を知り尽くすとか、海の全てを知るとか、何かそういうものがガサッとコンセプトとしてあって、それぞれ、このパーツで知り尽くすためにはどういうものを提供するのかということの提供価値をちゃんと考えることになる。それを、ここからは設計する人とか、施設の皆さんの夢を実現することだと思いのですが、例えばさっき海藻ということをおっしゃった。海藻というのは、僕は現実的に海に潜って見たことがないので、多分、海の森なのですよ。ですから海の森を体験できるという、例えばこんな小さなドームがあって、海藻があってという、水槽の中を歩くようなものが例えばあって、そのわくわく感とか、多分そういうものにつながっていくと思うのです。

イメージしやすくなるように例えで言いましたけれども、多分、そういった形で全部がつながり合っていくので、一番大事なのは全体のコンセプト、ここに行ったら何がわかるのだろう、みたいなことは多分それは外に向ける一番大きな言葉かも知りませんが、あとはミッション、ビジョン、プロミスというところでそれを1つ1つ丁寧に押さえていって、展示そのものがそれを具現化しているということになっていくので、全体の展示コンセプト例と、もしかしたら外に出していくメッセージというのは非常に近いものがある、もちろん同じ言葉にする必要はないと思いますが、コンセプトとして中で考える人にとっての重要なキーワードになっていて、外の人にはそれをどうわかりやすく伝えるのか、みたいなふうになっていくような、そういう言葉の重ね合わせをうまく構成して、それがさっきのいわゆる構造図のようなものでもわかるようになっていくというようになっていくと、整理しやすくなるかなというふうには感じました。

○池邊委員 事務局の事前のあれにも書いていただいているのですが、私、先ほど鳩貝様がおっしゃられたような、まずここに入って、さっき発見という話がありましたけれども、何に感動するのかというのは、もしお子さんをターゲットにしたときでも、かわいいとか大きいとか、あるいは船とかを見てすごいとか、我々はよく「海は広い大きな」という言葉で育ちましたけれども、今のお子さんは、私の子どももそうなのですが、水族館に行く段階で、まずは海に触れたことがない子がほとんどです。私、新宿区におりますけれども。

海のザブンとする波がなぜ来るのか、それがどういう音があって、というのも、サーフィンとか何かテレビではみんな見ているのですけれども、そういう体験そのものが、潮干狩りも最近子どもはしていないですし、まずは海に行って足を突っ込む、そこに波がザブンと来る。それもないので、ですから、起承転結というふうに書かせていただいたのは、子どもによって何に、子どもだけではないのですが、何に興味を持つのか。マグロにももちろん興味を持つ子もいれば、クラゲに興味を持つ子もいますけれども、海と言ったときに、船だったり、あるいは海そのものの広さとか大きさとか、気持ちがいいとか美しいとか、まさにそういう世界を、海はすごいのだという部分を体験してこそ、さっき園長がおっしゃったロマンという言葉はとても大事だと思うのですが、ロマンまでなかなか行かないの

ですよ、多分。

そこに行き着く入り口が多様だということを前提に、展示というものの、さっき食いつきが悪いという話をしましたけれども、食いつきが多様な子どもたちの感性に対して、いろいろな食いつきをして、鳩貝さんがおっしゃられるように「きょう来てよかった」「何がよかった」「船がよかった」、あるいは「海はすごく広くて、すごくきれいだった」という、何かそういうそれぞれの感動みたいなものをうまく展示の中で味わえる。それで必ずしも海族ではないという部分も含めて、海というものにまずは興味を持ってもらう、感動してもらう、発見がある。そこをやはりもう少し重視して、いきなり魚、こうですとか、水槽という、何かそこに食らいついてもらわなければいけないという、そこに行くまでのイメージ、これは必ずしも館の内部だけではなくて、外の公園とか、そういうところでもできると思うのですけれども、海らしさみたいなものを感動できる部分というのがあるといいなと思いました。

○佐藤委員 多分、恐らく同じことを申し上げようとしているのですけれども、今までの議論の中で非常にはっきりしてきたことの1つが、発見するものというのが人によって千差万別だし、展示というものは実は多様な発見の機会、いろいろなものを見つけ得るのですね。だから、結局、1人1人が水族館に来て感動し、学んで帰れるかどうかというところは、何を見つけられるかにかかっている、見つけられる素材というのは、ある意味で、こちらが事前に用意しておくことをはるかに超えているのです。つまり、全く予想外のものまで見つけてお帰りになるわけです。つまり、どうやって展示を通じて新しい発見を促進するかという話だと思うのですね。多様な発見をどうやって促すことができるのか。

そのときに非常に重要なポイントになってくるのは、私自身が葛西で働いていたときにいろいろ考えたことの1つなのですが、やはりものを見る視点ですよ。マグロのひれの動きというのが、実はそれだけ見ていると1日おもしろがれます。そういう視点の提供というのが極めて大事で、さまざまな視点が適切に、展示とセットになって提供され、この展示をこんなふうに見てみたら、という提案が、できるだけたくさんあるというふうな状況ができると、個々の展示の魅力というのは倍加するだろうなと思います。

○木下副座長 事務局のほうで用意してくださったキーワードで「アイドル性・スター性」というのはどういうふうに考えたらいいか、よくわからないのですよ。何をもちてアイドルと呼称するのか。このあたりはどうですかね。少なくともショーをやる方向はとらないというのは合意されていることなのですけれども。ここでいう「アイドル性・スター性」というのは何だろうと思うのですけれども。

海藻やサンゴ礁等の多彩な色がある風景のところにもアイドル性は加えられているのですが、ここでいうアイドル。何かすごい海藻。みんなが好きになってしまうような海藻というようなことですよ。

○西座長 もし答えられるなら。

○小林課長 そこまですごい海藻まではイメージできていなかったのですが、アイドル性

だけでなくスター性という言葉もセットで入れさせていただいておまして、ほかとは違う、独自性だけではなく、それ自体が人を引き付けられる可能性があるもの、というふうに広く捉えさせていただいて、今、葛西ですと、ジャイアントケルプの水槽がございませけれども、あちらではよく、その前にお座りいただいて、ずっとその水槽を眺めてくださっているお客様もいらっしゃるというところで、こういう可能性があるのかなというふうに感じて、印をつけさせていただきました。

○川廷委員 さっきの海の森の話がどうしてもイメージができてしまっているのですが、例えば金沢21世紀美術館で、下から見上げるプールがありますね。あのイメージなのですね。あれ、すごくみんながインスタ映えするというので写真を撮って、人が集まる。あれもいわゆる「アイドル性・スター性」の1つではないかと。つまり、展示物だけでなく、展示効果によってスター性を引き出すということもあるのかなと。だから、単なる大きな海藻でも、それが海の森と歩いて歩いたら、それが1つの「アイドル性・スター性」になっていくのかなと。世界中にどんな水族館があるかわかっていないので、それがあのかないのかも知りませんが、海の森を歩きたいというのはあるかなというふうに単純に思ったりしたので、そういう意味もここにはあるというふうに感じました。

○西座長 まだまだご意見があるかと思うのですが、どうしてもという方はおられますか。

○小林委員 先ほど池邊委員がおっしゃられたこと、私も激しく共感したので、今の中に、参加とか体験とかいうのはぜひ加えていただければと思うのです。それで、どうもあまりにも多すぎて、いろいろな項目が整理されていなくて、頭に入ってこないかなという気がいたしまして、このキーワード自身を説明するような前段があってもいいのかなと。先ほどもどなたかおっしゃられたのですが、そのときに展示コンセプトで何を見せるのか。先ほど、種を見せるのか、つながりを見せるのかという、とても重要な視点が示されたかと思うのですが、見せるものは環境だったり生物多様性だったり、生態系だったりつながりだと。それに対して、方法として、参加とか体験とか交流があつて、その結果生まれるのが学びや癒しだというようなキーワード自身の整理をつけてみたらどうかなと思いました。

○西座長 ありがとうございます。展示について、いろいろと議論が深まったのではないかと思います。1の「ミッション／ビジョン」から始まって、ずっと全部つながっている。どんどん具体的になってくるという流れではないかなと思います。

この展示については、まだまだ検討しなければならないと思うのですが、事務局のほうでこの展示計画について、1つ提案があるということですので、ご説明いただきたいと思ひます。

○小林課長 お時間をいただきまして、ありがとうございます。

今「ミッション／ビジョン」、また「4つの機能」、そして「飼育・展示」ということで、非常に貴重なご意見をたくさんいただいているところでございますが、展示をどう考えるかというところが、結果として水族館の大きな魅力を伝える手段になるというふうにございます。そうしたこともございますので、展示のキーワードからどのような展示水

槽が考えられるのか。想定される、例えば海域ですとか生き物、適切な水量、ボリューム感といったもの、そういった具体的なイメージといったものの一例をお示しいただけないかというふうに思っています。

ただ、海域や生き物、水量などとなってきましたと、生物の生態などの専門知識なども関連してくるかと思しますので、こういった生物関連に精通していらっしゃいます西座長、また佐藤委員、鳩貝委員に、検討会とは別に事務局でご意見を伺わせていただきまして、第4回、第5回の検討会の中で、また皆様にご確認いただくというような進め方ができないかと思っております、提案をさせていただければと思います。

○西座長 今の事務局の提案、いかがでしょうか。よろしいでしょうか。

（「異議なし」の声あり）

それでは、事務局案のとおり、佐藤委員と鳩貝委員、私も入って、展示水槽のイメージについて検討し、皆さんの確認をその後いただいこうと思います。

それでは、大分時間が押していますが、あと続いて、運営と施設性能、周辺施設との連携について、まとめてやっていきたいと思っております。

運営について、ご指摘のように、ここは「ファンの増やし方」と「広報・連携のしかた」あるいは「経営の観点」というような分け方があるのですが、これを修正したほうがわかりやすいという話があったので、まとめ方をどうするかということと、それから、非常に大きな問題になってくる入園料金については、参考資料として、この近郊の水族館の規模だとか入園料がまとめられた資料がありますので、これなどを参考にしてご意見をいただければと思います。いかがでしょうか。

○佐藤委員 どのようなチャンネルを通じてサービスを提供するか、という課題が非常に重要だと思っています。解説板であったり、ICTの利用であったり、いろいろなことを当然考えるわけですが、恐らく本当に基本になるのは、私は人ではないかと思っています。つまり、きちんと情報を整理して、対話型で、インタラクティブに伝えることができるメディアとして人に勝るものないわけですし、まさにそういう人材をきちんと要所要所に配置できるような、これは博物館で言えばインタープリターのような方がきちんと水族館にもいるという状態をつくるのが、多分、何よりも重要なポイントではないかと思っておりますし、そのための予算や人員の措置というのをきちんと考えるべきではないかと思っています。

○西座長 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

○小林委員 まとめ方のところで「ファンの増やし方」と「広報」が1つで「連携」が別なのではないかというのは私が申し上げた意見なのですが、皆さん、いかがでしょうか。

「ファンの増やし方」と「広報」が一体で「連携」というのがもう1つの項目ではないかと思ったのですけれども。

○西座長 このことについてはよろしいですね。

ほかにいかがでしょうか。

○鳩貝委員 葛西の立地というのは、公園という中にありますよね。ほかの民間の水族館

の中には、ほかとのかかわり、例えばすみだ水族館はほかの施設のところへ来る人たちも含めて集められるわけですね。モンレーもまさにそのとおりで、いわゆる観光客が来られる場所なのですね。そこいくと、本当に葛西の場合には、私にとってはいい環境なのですが、より多くの人から見ると、行きにくい場所でもある。そういう立地のことも考えて、どういうふうに観光客をふやすのかを真剣に考えないといけないのかなと思います。幾らいいものをつくったにしても、人がそれだけ来ないことには評価がどうしても落ちてしまうという部分がありますので、何かそういう、広報とのかかわりになるのですが、周りとのかかわり、地域の振興、活性化とのかかわりなども考えながら構想をしていく必要があるかなと思います。

私も具体的にその辺が、行政の人間ではないのでよくわからないのですが、要するに、ここの部署だけで考えるのではなくて、まちづくりとのかかわりも考えながら構想していく必要があるかだと思います。

そういう意味では、同じように、中身の面で教育、研究ということを考えたときに、前回も申し上げたのですが、1つの部局の中だけではなくて、やはりもう少し広い連携、ほかの部局との連携を事前に十分した上で具体的な計画を進めていく必要があるかなというふうに思います。

○西座長 ありがとうございます。今のご発言に関連して、前に鳩貝委員から教育委員会との関連とかということがありましたけれども、事務局のほうでその後、それについては何か。

○小林課長 今、葛西臨海水族園のあり方検討会ということをやっておりますというところでの話はしてきてございます。ただなかなか、葛西がどういうことをやりたいのかという具体性が見えないと、単純には難しいというようなお話でございましたが、引き続き窓口でのお話はさせていただけるという形であるかとは思っています。

○西座長 ありがとうございます。では、またもとに戻って、いかがでしょうか。

○川廷委員 英語表記の「Tokyo Sea Life Park」というのはすてきだなと思いました、というのが1つあります。これ、すごくコンセプトualなものになっていくのだろうなと思ったので、あえて強調しておきます。

あと、料金のことなのですが、今、資料を見ますと、国内来園者数1位の美ら海水族館が大人1,850円で、大阪・海遊館が2,300円。それだけの人が入る金額で、これでも入っているということを考えると、多分、これだけ議論している展示コンセプトとか具体的展示が料金に見合うものになるのではないかなと思うので、僕は施設管理とかサステナビリティを考えたら、たとえ都の施設であったとしても、それなりの料金体系を設定していいのではないかと。ただし、目的別で、いわゆる学校教育目的とかそういうところの価格設定とか、目的別の設定をきっちり行うこと。一般入場に関しては、きっちり取っていったほうが運営上はきっといいと思いました。

あと、さつき佐藤委員もおっしゃった、いわゆるインタープリターとか、そういった人

の問題は非常に大きいというのは本当にそう思っています、伝え手の問題、例えばなのですが、できるかどうかは全然わかりませんが、国の環境省のビジターセンターのようなレンジャーの人たちとか、そういう人たちとのコラボレーションはないのかなと。ここは東京湾であって、葛西ではありますけれども「Tokyo Sea Life Park」なので、そういうことというのは国も含めて一緒に考えて、インバウンドを考えたら4,000万人を受け入れなければいけない日本政府の考え方からすると、もっと国もこういった施設をうまく利用して、いわゆるインバウンドの観光客に対しても、まさに「Tokyo Sea Life Park」を体験してもらいたいような、そういうものを作っていきいかなと。まさに江戸文化とか、さつき園長が文化の話も担っているということをおっしゃっていましたので、そんなことも含めて、しっかりとした、価格に見合う価値提供ができるのではないかなと思いました。

○千葉委員 先ほどファンと広報、そして連携とは別だというお話がございましたけれども「企業との連携」と書いてございます②番、これは広域に近隣自治体との連携も必要かと感じております。

例えば成田空港に入られたお客様、外国人客、レンタカーを利用する率が高まっているかと思いますが、東関東道を利用されて、ディズニーランドは行くけれども水族館はパッシングでそのまま東京へ行ってしまうということがないように、やはりそのあたりを自治体とも連携しながら、広域にやってくるのが必要なかなと感じました。

先ほど多言語化、そして本当に人が重要で、インタープリターとかレンジャーだとか、本当にそういった方たちからの説明が私たちに本当の意味での感動を与えるのですが、それを多言語化していくのは非常に難しい部分があるかと思ひまして、この間、東京タワーの特別展望台がオープンされたときに1日早く見させてもらったのですが、モバイルで多言語、首からぶら下げて、それを返却すればよいと。そこには景色が見えるようになっていて、自分が立ったところから向こうは皇居であるとか富士山であるとか、わかるようになっていて。そういった本当に中東の方でも、マイナー言語の方でも楽しめるような機材も必要になってくるのかなと思いました。

料金に関しては、私も高めの設定は逆によろしいのではないのか。理由としましては、やはりそれなりの経営的観点で、決して安くする必要はない。都民であればとか、段階的にしていくのがよろしいのかなという考えでございます。

○西座長 どうもありがとうございます。料金はそれなりの、と考えたほうがいいたろうということ。

○小林委員 料金については、私ももっともっと高くてもいいと思うのですが、1つだけ都の施設として、今、中学生が250円で小学生が無料ですね。この小学生とか中学生をどうするのかというのは、かなり大きな問題かなという気がしますので、例えば大人がよければ2,800円だったとしても、中学生以下は無料だとか、そういった大胆なメリハリをつけてみると、あるいは都内在住だとか都内の学校の人たちは無料とかいうことをすると、割

に受け入れやすいのかなど。それから、学校教育の現場が来られるような環境を整えるということもすごく重要なことというふうに思います。

それともう1点だけ「ファンの増やし方」で、展示のあり方のところもすごくかわるのですが、ご専門の方がいらっしゃる場所で何なのですが、私はやはり葛西の場合は環境がとても重要だと思っているので、今、エコツーリズムだったり、本当に普通にアウトドアと言われるもの、自然の中でお日様の光を浴びてレジャーをするというのが家族連れにとってとても魅力のあるものになっていると思いますので、周りの自然環境を利用した、お客様の呼び込み方というのを1つ柱にするというのは、ほかの都の水族園とか動物園との差別化も大きく図れるのではないかなというふうに思っています。

○木下副座長 先ほど英語名称がすばらしいという話が出ましたので、ぜひこの機会に日本語名称をかえたらどうかなと思います。もうかたすぎて。今、比較表を見ても、お役所仕事だなという感じがします。この機会に本当に大胆にかえたらもっと人が集まるのではないですか。本当に「東京水族館」ぐらいにしまつて。

この「園」を使ってきたというのはあるこだわりがあったと思うのですが、上野から独立していくときに、これはあえて「園」にしたのですよね。

○小林課長 今の葛西をつくり出すときにも懇談会のような形で開催させていただきまして、どういうものを展示すべきなのかというところを議論してきてございました。

葛西臨海公園という中にもありますし、1つの館だけではなく、今は園地、水族園としての園地内にございますけれども、そこの水辺の自然などもございますが、全体の園として楽しんでいただくというような考え方から、「園」という名称を選んだということ聞いてございます。

○木下副座長 少なくとも、今、再考すべきときかなど。これを逃すと、また変えられないと思います。

○川廷委員 済みません、言い出しっぱなしなので。「Tokyo Disney Land」「Tokyo Disney Sea」「Tokyo Sea Life Park」と並んでも遜色ないと思うのですよ。このままでも行けるのではないですかと、正直、思いました。みんな覚えてくれればいいだけの話で。ぜひご検討いただければ。

○佐藤委員 話をもとに戻してしまうのですが、やはり人としてのインタープリターのようの方々というのが非常に重要だということを改めてもうちょっと深く考えてみると、単に説明する人ではなくて、そもそもストーリーをつくれる人が必要です。お客様の視点から、どのような起承転結のあるストーリーを、水槽を見ることによって描けるのかという、そのコンテンツづくりができるというのは、相当高度なプロフェッショナルです。

そういう高度なプロフェッショナルが一方では必要ですし、そんな人をたくさん雇うのはあり得なくて、むしろそういった高度なプロフェッショナルがつくってきたようなコンテンツを本当に現場でうまく使っていくような人たちというのが一方では必要です。そのときに、やはり私は、ボランティアというのは本当に真剣に考えるべき1つの園のあり方

であろうと思うのです。

つまり、ボランティアという人たちが単にお手伝いではなくて、ボランティアの方々とさまざまなプロフェッショナルリズムを持った職員がインタラクションをとりながら、この園自体のコンテンツをさらに練り上げていく。展示はコンテンツがついて初めて意味を持つので、コンテンツの部分をいかにきちんと練り上げて、魅力的で新たな発見に満ちたものにするかというところをつくることができる。その体制をつくるというのが非常に大事ではないかと思います。

まさにペイドボランティアのような形で、ボランティアといいながらもきちんと交通費ももらっていますし、日当ももらっています、というような形であってもいいだろうなと思います。そういった形でできるだけ多様な人材が水族館にかかわってくださるというふうな運営の仕方を提案したい。

○西座長 非常に重要だと思います。

○鳩貝委員 私も全く同感です。いろいろな博物館、水族館等に行っても、やはり説明してくれる人、話をしてくれる人との出会いで随分違うのですね。順に見なさいよと言われても、気づきもないまま、ただ通り過ぎてしまう。学校なんかでも、言葉は悪いですが、放し飼い状態にしてしまっていて、子どもたちは早く通り過ぎて、ショップのほうで楽しもうとか、本末転倒になってしまうことがありますので。

今、サイエンスコミュニケーターを要請するような大学院もあります。そういう動きが非常に重視されてきていますので、そういう人たちが採用できる、そしてその人たちが中心になって、今、お話にありましたように、内容を練り上げながらすばらしい説明、やりとり、会話、出会いができるようなスタッフをたくさんつくっていく。その人たちがやはり生き生きとやれる職場環境というのでしょうか、片手間ではなくて、やれるような環境もきちんとつくっていく必要があると思います。それが新しい意味での館のあり方になってくるのではないかなと。

今、経済効果ばかりで、外注すればいいという方向になっていって、本当にいいものができるのかどうか、私は非常に心配なのです。経済効果だけではなくて、内容、文化、そういうものを伝える役割、東京都だからこそそれが必要なのではないかなと思います。

○池邊委員 今のお話の中で1つはここの中に、求められる施設機能とも関係してくるのですが、一番最初にも言いましたけれども、葛西臨海、駅をおりて、公園があるのですが、やはり横浜のグランモール公園が最近リニューアルされたのですが、ご存じでしょうか。横浜ですと、海の素材を全部あの地域に集合させているのですが、都内ですと、先ほどもやはり葛西臨海は遠いという話があったのですが、都民だと晴海に行くと船が見えるのだけれども、水に触れるためにはお台場海浜公園だったりとか、なかなか集中して見えない。

そういった意味では、やはり葛西臨海のあの広大な公園そのものを水族館のコンセプトに合わせた形で、わくわくドキドキをだんだん高めていくような公園としてリニューアルができるといいのかなと。

今、都市公園法が変わりまして、いろいろな施設もできるようになりましたので、まさにそういうところではお寿司とかも提供してもいいのかなと思います。あと、こんなにディズニーランドに来る人がいながら、あとは豊洲とか市場に来る外国人もいながら、葛西臨海に人が来れない。こんなに近いのに。そこが非常に問題であるので、そのあたりは豊洲なんかでも今度新しくできたら、こういうものの実際は葛西臨海で見えるよとか、そういう日本海というものの資源みたいなもの、食文化との、あるいは漁労というものとの関係みたいなものをもう少し、都の施設でできるわけですから、その辺連携を取るといことと、あとは公園そのもの、海というものを感じられるような、あるいは子どもたちがもう駅に着いてすぐ「わあ！」と言って、行ってみたいという、そういう施設があるような公園に変えていただくと、そこからだんだん海の世界に入っていくということ、あるいは足湯ではなくて、海にザブンとするようなことが体験できてもいいかもしれないですけども、砂とか、そんなものが体験できるような公園であって、そこから中に入っていく。あるいは、アフターでその公園で遊べる。そんなことができるといいのかなと思いました。

○西座長 ありがとうございます。

○海津委員 最初のころに話が1回出たと思うのですが、子どもたちとか学校団体が大事だという中で、現在の駐車場の位置とか、団体でお弁当が食べられる場所がないというところは、今回、ベーシックなところですが、ぜひリニューアルされる時にに入れていただきたいところだと思います。

それから、ユニークベニューの話も出ていたと思うのですが、水族園もそうですし、その周辺も含めてどんな利用の仕方を進めていくのかという企画がとても大事だと思うのですね。展示そのもののよさはもちろんなのですが、活用のあり方のプランニングをこれからずっと継続的に進めていくというときのスタッフというか、そういう部門とか、それを使いながら、観光のセクションと連携をしてPRをしていく。単独の施設のPRだけではなくて、連携の中でのPRを進めていくということがとても重要かと思います。

調査・研究が大事だという話があって、研究機関と連携も提案に入っていると思いますが、研究機関のプレゼンテーションもここでやっていただいて、一般の来館者に聞いていただくというようなことなども含めて、マーケットインの発想で考えていく必要があるかと思います。

○池邊委員 1つだけ忘れたことで、これ、水上からは入れないのでしょうか。

○小林課長 葛西臨海公園は水上バスがとまれるようになってございます。ただ、非常に本数が少ないもので、あまり活用はできていないかもしれません。

○池邊委員 そこが、ニューヨークなんかブルックリンブリッジパークは、新しい水上バスでベビーカーやなんかそのまま、いわゆる座れるというのではなくて、栈橋がそのまま船になっているような感じですね。そういうもので、セントラル部分とブルックリンブリッジパークとの間を、一緒に、結構何便も行くようなものであれしていますので、ぜひとも東京の中心に来たお客さんがそのまま行かれるような、まさに海を体験してしぶき

を浴びながらここに来られたら一番すてきだと思いますので、ぜひともよろしく願います。

○佐藤委員 今の議論を踏まえて、2点だけ申し上げたいのですが、恐らく今の話は、例えば学校の人たちから見たときにどんな施設が必要かとかいった議論は、ステークホルダーエンゲージメントの話だと思うのですね。つまり、どれだけ初期の段階からそういうステークホルダーの方々、特に教育を中心にするのだったら学校の先生方と、きちんと対話をしながら、どのようなニーズがあるか、どのようなものが望まれているかというところをきちんと把握するという話が必要です。また、恐らくは旅行会社の方々、あるいはエコツアーをやってらっしゃるの方々といった、さまざまなステークホルダーをきちんとアイデンティファイした上で、一緒になって考えていただくという作業は確実に必要だろうと、つくづく思います。

その中で、恐らくかなり重要なポイントになってくるのは施設の環境負荷の部分ではないかと思っています。これは単純に温暖化どうのこうの以前に、水族館という特殊な施設の非常に重大な環境負荷の1つがやはり資源なのですよね。野生の魚をつかまえて展示するというのを、いつまで続けるのか、というところも本気で考えなければいけない。そのときには恐らくは本当に持続可能な漁業として認証をとっているようなところから、きちんと主な展示素材を提供していただくとか、そういった形でのこれまたステークホルダーとのかかわりを考える必要があります。どのようなところに水族館の重要な資源である生き物の入手経路があるのかといったところを本気で考えて、少なくともサイテス（ワシントン条約）とか絶滅危惧種などにリストされているようなものを野生からとってこない。そういったことはかなり注意してやる必要が今後あるだろうと思います。

○西座長 ほかに、どうしてもという方。

○千葉委員 観光の観点からお話させてください。アクセシブルというところだけ、やはりすごく重要なのだと思いました。バリアフリーのところ、7ページですが、それは健常者に対してもアクセシブルであるという場所づくりが必要だと思いました。例えば私、高血圧で血圧の薬を飲んでいるのです。もう50歳を過ぎたらダイビングはできないなど。すごく潜っているような感覚で生物が見られるだとか、健常者であってもそういうことが体感できる。

例えば美ら海もジンベイザメが、ご飯をレストランで食べながら隣で泳いでいるのがみんな感動ですよ。あとは八景島シーパラダイスも、先ほど海藻のトンネルとおっしゃったけれども、自分がトンネルの中の、上に泳いでいるのが感動ですので、やはり本来だったら潜りもできないお年寄りの方もお子さんもアクセスできるというところが、コンセプトから全てにおいて言えるのかなというふうに思いまして、バリアフリーというふうにありますけれども、それは第1条件であるというところをお伝えしたかったのと、それからステークホルダー、先ほどお話が出ていましたけれども、川崎市では臨海地帯で工場夜景をプロモーションするときに、やはり陸と海からということで、決してこの水族園という

かシーライフパークはエージェントの方に選んでもらう立場の施設ではなく、川上に立って、都民をモニター、例えば最大のステークホルダーはきっと都民の方だと思いますので、そういった方たちにモニターツアーをやるだとか、その中で例えばエージェントを選別していくだとか、そういった仕組みづくりが今後必要になっていくのかなと思いました。

○西座長 ありがとうございます。まだまだ意見をお聞きしたいと思うのですが、時間が来てしまいました。

きょうのいろいろなご意見を事務局のほうで、大変でしょうが、まとめていただいて、次の4回、5回で何とか報告書の形をつくるという方向で行きたいと思います。

では、事務局のほうにお返ししたいと思います。

○小林課長 西座長、ありがとうございました。

次回でございますが、お配りしております資料に、スケジュール表というものが入っております。「今後のスケジュール」という、A4の縦の資料でございます。第4回は6月に、都庁の会議室の開催を予定してございます。詳細は別途ご案内いたしますので、よろしく願い申し上げます。

以上をもちまして、「第3回葛西臨海水族園のあり方検討会」を終了させていただきます。本日は、どうもありがとうございました。

(午後0時29分終了)